
支配的な異常者

ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

支配的な異常者

【Nコード】

N21800

【作者名】

ジュン

【あらすじ】

異常であつた少年は、その考えのままに全てを蹂躪していく…。

主人公 神埼帝が暴れるお話。

更新は思い付き次第？

プロローグ(前書き)

なん…だと？

まさか…また増やしてしまうとは…。

と、いうのは置いといて、更に書いてみました。

プロローグ

俺は生まれてから既に異常であった。

生まれてすぐの記憶なんてものは覚えてはいないが、俺の現在の異常さ…コレこそが俺が異常であった証だと思っている。

一歳ぐらいからの事は覚えている。

その頃から既に俺は普通に二足歩行出来ていた。

ソレは一般人と比べれば既に異常であった。

ソレを見た親は最初の内は「この子は天才だ」とか「大物になるに違いない」とか言っていたが、ソレもしばらくたてば覚め、逆に気味が悪くなったのか色んな病院に連れていかれた。

結果は言わずもがな異常無しであったのだが……。だが今日は、異常を検査する病院へと行くらしく、俺は下らない我が親の我が儘に付き合い、病院へと向かっていた。

(下らない……。こんな無駄な事をしているよりも、俺様にはこの有り得ぬ存在に相応しき実に異常で実に奇抜で他人には到底真似できぬ生き方が相応しいと言っつのに……)

そう思いながらも俺はしょうがなく到着するのを待っていた。
しばらく経つとやっと病院へと辿り着き、俺は検査を受けること
になった。

俺は仕方無く手頃な場所を探す。
すると、ぬいぐるみを引き摺るヤツが立ち上がった。

「『だって世界には目標なんてなくて』 人生には目的なんてない
んだから」

そんな事を喋りながらも、その男は五番検査室に入っていった。
俺はソイツがいた場所に座る。

「お前もそう思うのか？」

「……………何をだ？」

「人生には目的なんてないというあの男の言葉だよ」

「…分からない。何のために私が生まれてきたのかも」

名札を見たところ、その少女はくろかみめだかと言っらしい。漢字
で書くなら多分、『黒神めだか』と書くんだらう。

「生きる意味？下らぬな。そんなモノは生きていく中で自ら見極めるものだ。故に、黒神めだか。お前はまだ考えなくても良いことだ。いずれ分かるのだからな」

「貴様の生きる意味は見付かっているのか？」

「フツ……。愚問だな。俺様の生きる意味はこの有り得ぬ存在に相応しき実に異常で実に奇抜で実に支配的な一生を送ることだ」

「貴様は独裁者にでもなるつもりか？」

（独裁者……。素晴らしいではないか。俺様らしい最高に愉快で異常な生き方ではないか！）

「その考えは無かったな！ソレも良いかも知れぬな」

「神崎くーん。三番検査室に入ってくれー？」

看護婦が俺の名

神崎帝かんだまみかじと言っのだが、その名を呼ぶ。

「俺様の方が先か。ならまたいずれ会えたならば会おう。黒神めだ

かよ。俺様の名は神埼帝と言う。覚えておけ」

「分かった。覚えておこう」

そう言い俺は三番検査室へと入っていった。
其処には小学生が椅子に座っていた。

「小学生……？迷ったのか？」

「あたしは小学生じゃないよ？人吉瞳。ちゃんとした心療外科医だよん」

「そうか。ならば良い。手短に頼むぞ。俺様とてこの程度の事に時間には掛けられぬからな」

「分かったわよ」

その後、俺はその小学生（心療外科医らしい）に問診され、結果的に通院の必要が有るといふ判断となったのだった。

「……チツ……。俺様がこのような事で足止めされるとは……実に不愉快だ……」

俺は激しく気分を害されながらも、仕方無く自らの家に帰っていった。

プロローグ（後書き）

主人公の行く末はどつちだ!?

…まあ、原作寸前まではオリジナルストーリー（多分四話くらい）
で進めて行こうかな？

いや、名瀬ちゃんにも会いたいね！

キャラ紹介（前書き）

見たい書くの忘れてたー！

何回更新すんだよ！

キャラ紹介

キャラを紹介します！

名前

かんざみかど
神埼帝

身長

178?

体重

63?

誕生日

8月12日

星座

獅子座

血液型

AB型

性格 一人称は俺様で、性格は基本的に知らない人間には横柄な態度で接する。が、ある程度仲が良いと仲間想いの良いヤツとなる。

見た目 短髪のオールバック。髪の色は赤色。目は紅い切れ目で、

顔立ちは整ってる。

黒神めだかとは同年齢で、人吉と同様に黒神めだかの幼なじみ。だが、小学・中学は一緒ではない。本人が自らを『異常』であるというだけあって、それなりの異常を持つ。

帝の異常は、『完全支配』パーフェクトルといい、異常な迄に特化してるのは人の上に立つ事。

異常性は『絶対的服従』と『政治活動』、『人望』、『人心掌握』、『通語共通』。ソレに、大概の人間を力のみで支配できる程の力を持つっている。

『慢心は俺様を腐らせる』という考えを持っており、力を求める鍛練は怠らない。

『絶対的服従』

他人に命令をする事で、その対象の人間を服従させる。目を見ることで、更に上の完全なる服従を与える。

服従は電磁波によるものではなく、簡単に言えば洗脳ブレインコントロールみたいなもの。また、自らに対しても暗示のような形で可能。

普段はON・OFFを切り替えている。

『通語共通』

帝が聞く言葉は外国語であれ何であれ、全て日本語として聞こえる。また、話す言葉を日本語で喋ろうとも、相手から聞けば自分の国の言葉を喋ってるように聞こえる。

人外の言葉でさえ日本語として聞こえる。自動の通訳みたいなもの。

キャラ紹介（後書き）

べ、別にフランス語分かんね。

じゃあ、そう言う異常付けちゃえば良いじゃん。

とか、そんな事思ったワケじゃ無いんだからね！

……やってて虚しくなった。

結局帝は王土に似てるのか？

いや、そこまで似ては無いと思うが……

第一帝 人吉との出会いと旅立ち（前書き）

ハーレム要望が……。俺には文才が無いんだ…。

ハーレムにしたら、それは混沌に…。

って、感想が欲しかったりします！

第一帝 人吉との出会いと旅立ち

最初に検査に行った日から、毎日毎日だらだらと検査は続いていた。その度に、毎日のように黒神めだかと会い、数分程だが毎回話をしていた。

そして今日も俺は黒神めだかと会つと、いきなり……と言つても、此処まで続けばそう思うのだろうが、逃げようと声を掛けられた。

「帝。私と共に外に逃げないか？」

「ハハハッ。愛の逃避行か？」

そう言つた瞬間、俺は黒神めだかに凄く睨まれた。

全く……冗談だと言つのに……。

「……嘘だよ。良いだろう。このだらだらと続く検査には俺様も飽々としていたところだ。行くか、めだかちゃん」

「ならば行くぞ、帝」

ついでに言うと、呼び方が変わっているのは、毎回話していた為に多少親睦が深まったからだ。

「鍵か…。下らぬな。こんなモノで俺様達が行く道を阻むとは…」

そう言いつつも、俺は鍵を捻り潰し引き抜き、扉を開けた。そして、近くの角に隠れると遠くから声が聞こえてきた。

『おい！13番と14番 黒神めだかと神埼帝はどこに行った！？探せ！！まだそんなに遠くには行ってないはずだ！』

「外に逃げるのは中々に骨が折れそうではあるな」

「いや、無理じゃないか？仕方ないから取り敢えず何処かに逃げ込もう」

俺はめだかちゃんの提案に賛成し、取り敢えず近くにあった託児室に入り込んだ。

託児室とは、病院に勤める医者や看護師が、勤務中に幼子を預ける部屋なので、先客がいるのは承知済みであったが、意外にも中に入ったら先客が一人いるだけだった。

(パズル…か。まあ一般人からすれば、パズル何てものは難しいモノなんだろうな)

中にいた少年は、知恵の輪のようなパズルを行っていた。

「おい。そんな単純なパズルに何を手こずっておる？貸せ。私がやっつてやる」

めだかちゃんは挨拶代わりに知恵の輪を解いていた。

俺はもっぱら壁に腰を預け腕を組み、その二人を見ていた。

「全く……今逃げてる最中だって分かっているのか？まあ、何か有れば俺の力を使うまでだが」

しばらくめだかちゃんはパズルを解き続け、しばらくその少年と話していた後、その少年を連れ、此方に向かってきた。

「初めましてー！僕は人吉善吉だよ！」

「俺様は神埼帝だ。よろしく頼むぞ？人吉」

「聞いてくれ！私の生きる意味が出来たぞ！」

めだかちゃんは何故だか若干テンションが高くなりつつも話しかけてきた。

「そうか。ならば教えてはくれぬか？めだかちゃん。お前が生まれしてきた意味を」

「私はみんなを幸せにするために生まれてきたそうだ！この人吉が言っていた」

「そうか。人吉…感謝するぞ。俺様はめだかちゃんには生きる意味は教えられぬからな」

「???全然いいよー！帝君も仲良くしようねー！」

子供特有の無邪気さに満ちた笑いをしながら、人吉は俺に笑いかけてきた。

「フツ…。良いだろうよろしく頼むぞ人吉？」

その後、俺達は結局待合室に戻り検査を受け、暫くすると退院する

事が出来た。

(今までの通院は何だったんだ……)

そう思いながらも、俺達は暫くの間共に過ごし、そして俺は小学生になる一年前……

「帝……本当に行っちゃうの?」

「ああ。善吉、めだかちゃん。しばしの別れだな」

「…何故行ってしまっただ?」

善吉とめだかちゃんは少し涙目になり、理由を聞いてきた。

「慢心は俺様を腐らせる……故に、此処で立ち止まっては俺様は腐りきってしまう。だから、俺様は更なる高みを目指さねばならない。ソレが俺様の歩む道。そして、誰にも真似できぬ一生を歩まなくてはな」

「いつか…戻って来て!」

何か急に態度が豹変するめだかちゃんに若干動揺しつつも俺は返事をすることにした。

「あ、ああ。分かった。約束しよう」

「約束だ！…って帝？一体何処に行くの？」

「ああ。そう言えば言って無かったな。俺様はフランスに向かう」

フランスに限らず、アメリカ等でも良かったんだが、とか付け加えた後に話を続ける。

「何でだ？」

「彼処は大統領制…かつ、大統領の権限が非常に強いからな」

「??？」

善吉は頭にたくさんハテナを並べ、めだかちゃんは少し溜め息を吐いていた。

「独裁者になる……か？」

「良く分かったな？」

「全く…どうやってするつもりなのだ？第一あの時言った事をまだ覚えていたのか？」

「勿論だろ？やり方は秘密だがな？」

そう話した後俺は身支度を整え、単身フランスへと旅立つのだった……。

第一帝 人吉との出会いと旅立ち（後書き）

帝は原作の外の世界をぶち壊すぜ！

そして、帝はめだかの一年年上設定。
名瀬ちゃん達と同年齢だ！

第貳帝 独裁者への道（前書き）

こ・う・し・ん・だアアア！！

…テンション高くてすいません。

晴れてたんでテンション高くなってしまいました。

第貳帝 独裁者への道

無事フランスに着き、まず俺は大統領の居場所を探る為に情報を集めようとしていた。

ちなみに現金の方は、株で元々儲けていた為、余裕があった。

「すまない。大統領は何処にいるか知っているか？」

「どうしたんだ坊や？大統領？大統領なら、今はシャルトル大聖堂の方に礼拝に行ってる筈だよ。けど、今の所在地はパリだから割と時間がかかると思うよ？」

「感謝する。それではな」

そう言い、俺はシャルトル大聖堂へと走り出した。

地理に関しては、昔地図を見て覚えたから大丈夫な筈だ。

(それにしてもあの男……。この俺様を『坊や』だと……。？いや、情報を提供されたのだから仕方がないか……。)

そう思いながらも、俺は突っ走って行った。

それから大体二時間が経ち…なんとか俺はシャルトル大聖堂に辿り着いた。

其処には屈強なSP4人が大聖堂の前で警護を行っていた。

「フツ……。大統領はいるみたいだな…」

ついでに補足しておく、確かにあの男はフランス語を話していたが、俺の異常の一つである『通語共通』という異常のおかげで相手が何語を喋っても日本語に聞こえ、逆に俺が日本語で喋っても相手にはその言葉で聞こえる。
実に便利な力である。

（護衛は外に四人……。中には九人はいると考えるべきだろう……。俺様には油断も慢心も無い…。本気で叩き潰させて貰おう……。）

俺は精神を集中させた後、SP達の元へと歩き出した。

「おい小僧。今は大統領が礼拝中だ。入る事は許されないぞ」

（はぁ……。世界遺産だつてのになぁ……。）

俺はそう思いながらSPの言葉を無視して更に進む。

「おい！！聞いてんのか小僧！！」

そう言ってソイツは俺の肩を掴んだ。

「ンだよ……。このクソカス野郎が……」

「なっ！？何だとテメエ！！ガキだと思って調子に乗ってんじゃねえぞー！」

「ビル！ソイツから直ぐに離れるー！！」

ビルとかいうヤツは、激情してか俺の放っている殺気を無視して怒鳴るが、横にいた男の方は殺気を感じてビルとかいうヤツに対し声を荒げていた。

「チツ…！何なんだよクリス！」

「馬鹿野郎！あのガキの発していた殺気が分からなかったのか！！あのままだったら確実にテメエの首が飛んでたぞ！」

（首なんて飛ばさねえよ。人聞きが悪いな……）

「おい。お前一体何者だ？」

「俺様か？俺様の名は神埼帝と言う。何、貴様らは俺様を止められんよ。止めたいなら……殺してみせろ」

「ふざけやがって！ぶっ殺すー！」

ビルというヤツはかなりの激情家らしく、またもやキレて突撃してきた。

「猪が……」

「ぐむっ……！？」

「ビル……」

俺はそのビルとかいうヤツの口らへんを掴み、顔を近付けた。

「俺様の目を見る」

「ぐむむ……………」

ビルは暴れるが、俺から逃げ切れずもがいていた。

「『俺様に従え』」

俺は『絶対的服従』を使い、その男に命令した。

「……………了解しました。我が主よ」

「…！？……………神埼と言ったか。…貴様…何をした」

「さあな？お前もだ。『此方に来い』」

「なっ！？チツ！クソツ！どうなってやがる！？」

俺の命令に男は反発しようとするが、体がいう事を聞かず、此方へと歩いてきた。

「『俺様の目を見る』……………『俺様に従え』」

「……………了解致しました我が王^{きみ}」

この能力の恐ろしい所は、性格を改竄したとして、その五分以内に洗脳を解かなければ、その洗脳で植え付けた性格がソイツの本質となってしまうところだ。

「大統領の元に案内してくれ」

「了解致しました」

俺は歩き出した二人の後ろを歩いていく。
その間、五人ほどSPと遭遇したが全て俺の力を使い、従えていった。

「……………お前が大統領か？」

「…誰だ？確かに私が大統領であるか？」

「そうか」

「何を…！？SP！！お前ら私を助ける！」

俺が近づく度に何故だか大統領は助けを求めていた。

「……………黙れ」

「グツ…！？」

大統領の腹を軽く殴ると、大統領は鳩尾に入ったのか苦痛の声をあげていた。

「俺様の目を見る」

「……………何を……………」

目があつた瞬間、俺は口を開く。

「『俺様に服従し、その地位を明け渡せ』」

「……………了解しました。主の命とあらんば、私の地位などいくらでも捧げましょう」

そういつてる間に五分が経ったのかSP達の虚ろな目が輝きを取り戻した。

無論……俺に対し、完全なる忠誠を誓っているのだが…。

「ただし今で無くとも良い。その前に、他のヨーロッパ諸国の最高権力者と謁見させる」

「了解しました。早急に我らが主の為に機会を手に入れてみせましよう」

そう言い、大統領は片膝を着き臣下の礼を取る。

それと同時に大統領の後ろにいたSP7人も臣下の礼を取る。

「……我らが命は我が主が為に。この身……朽ち果てようとも我らは主が為に尽力を尽くしましょう」「」「」

あまりのハモリ形に若干口をひくつかせながらも、俺はそれに答えることにした。

「汝らの働き……期待している。俺様の期待に応えてみせよ」

「……イエス。マイロード!」

何処そのルーシユか分からない返事を返してきた。

「俺様は機会が来るまで影ながら政治体制と政治状況の把握をして
おこつ」

「分かりました我が主。真に僭越至極であります。主に働かせてし
まうとは私は非常に出来ない配下で申し訳が立たぬ心で一杯です」

「なに。お前は今から何が出来るかを期待しておるのだ。俺様の期
待に答えてくれるよな?」

「勿論でございます!」

そう言ってる間に五分が経ち、大統領の目が輝きを取り戻していた。

「さて、住む場所が無いからお前の家に連れていってくれまいか?」

「勿論でございます!ついてきてくださいませ」

「ああ」

そうして俺はフランスを早くも手中に治めたのであった……………。

(計画の第一段階は終了した。さて、俺様が世界を支配できるのはいつ頃になるであろうか……………)

第貳帝 独裁者への道（後書き）

ついでに言うと、ビル、クリス、大統領……モブキャラです。
いや、そんなオリキャラ出したってアレじゃん？
アレだよ。ビル&クリスはやられキャラだよ。

あと数話程帝王支配編が続くかな？（何だソレは）

と、次も見えてくれると有り難いです！

第三帝 ヨーロッパ統一帝国（前書き）

ヨーロッパ統一帝国 = European Union Empire
E U E

って略だったりします。

名瀬ちゃんを出せるのはいつかな…。

第三帝 ヨーロッパ統一帝国

俺はその後、大統領の家に招かれたが、大統領は意外にも独り身だった。

「何だ？独り身なのか？」

「お恥ずかしい限りです」

「いや、これから素晴らしき女性を探せば良いだけであろう？」

「有り難うございます。確かにその通りですね」

そんな感じで話し、それから俺は政治把握と立案をし、大統領は各国とのサミットのようなモノを開く為に日々奮闘していた。

それから一年……。

今日はヨーロッパ首脳会議の日である。

通常、各国が集まるような首脳会議サミットのようなモノであれば、一三年の時を経なければ行えないモノを僅か一年で行ったのだから素晴らしい快挙と言えるだろう。

「良くやったな」

「ハッ！有り難き幸せでございます！さて、本日参加国を言っていきます。アイルランド、エストニア、オーストリア、オランダ、フランス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ハンガリー、フィンランド、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マルタ、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、アイスランド、アルバニア、アンドラ、クロアチア、サンマリノ、スイス、セルビア・モンテネグロ、ノルウェー、ブルガリア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニア、モナコ、リヒテンシュタイン、ルーマニア　以上37カ国が出席します」

俺は国を聞いた時に何か国かが参加していないのに気づいた。

「イギリス、イタリア、バチカンの三カ国はどうした？」

「…申し訳ありません。その三カ国は用事があるとの事で、その一週間後に謁見の予定となっております」

(……………素晴らしく有能じゃ無いか？……………さすが大統領だな……………)

そう思いつつ、俺は準備をする。

今の年齢は8歳なので、特に何かしら疑われる事も無いだろう。

「ハハハッ！ やっと計画の第二段階に進む事が出来るな……」

「それでは御時間となりましたので、首脳会議へと向かいますよう」

「分かった」

そう言つて、俺達は首脳会議の場所……ベルサイユへと向かった。

そして着くと……やはりと言つべきか。

数々の首脳が集まつた其処は圧巻であった。

テレビの報道陣も外に控え、各国首脳が通る度にフラッシュの光が瞬く。

「今バレると面倒だ。裏口は何処にある？」

「裏口ですか？ はい。それならば、其処の路地を曲がり、後ろに扉がありますのでそちらに回ってください。此方が鍵となります」

「分かった。お前は堂々と正面から入っていけ」

「了解致しました」

(……無用心じゃないか？裏口を作っておくのは……)

そう思いながら裏口に回るが、裏口の戸を見た瞬間考えが変わった。分厚く強固な扉……。多分銃程度では扉はびくともしないであろう金属の扉。

それこそC4爆弾を使わない限り戸を開ける事は出来ないだろう。

「入るか……」

中に入ると既に全ての首脳陣は席に着いていた。

「さて、諸君。今回は態々此処……フランスまでご足労頂き真に感謝しよう。さて、今回の議長は私が務めるが異論は無いだらうか？」

そう言った後、全員同意を示す。

その直後、大統領と目が合い、向こうへと招かれた。

「さて、今回の議題だが

」

大統領は俺へと話を促す。
面目を保つ為だろう。

此処で俺を持ち上げれば、直ぐ様解散となってしまう為だからだろ
うな。

「 帝様。 お願いします」

違ったようだ。

コイツはバカだったようだ。

そしてやはりと言うべきか、場がざわめく。

「『 静まれ』」

その言葉と同時に、ピタリとざわめきが止む。

「『 俺様に忠誠を誓え！』」

「『『 畏まりました』』」

37カ国の最高権力者全員がその場に傅かき、俺へと忠誠を誓った。

「『ならば、俺様の元に一人ずつ来い』」

「『ハッ！』」

その後、俺は全員に『俺様に服従し、その地位を明け渡せ』と命令し、『全員に合図が来るまで待て』とも言っておいた。

「それでは五分休憩した後、解散とする」

大統領のその言葉通り、五分経った後に解散となった。全員虚ろだった目から回復し、輝きを取り戻した状況で帰って行った為、全く怪しまれる事は無かった。

その一週間後のイギリス、イタリア、バチカンの三カ国も同様に服従させた。

「さて、大統領！今すぐコレに書いてある通りに政治を変える！他の40カ国も同様だ！」

「しかしそれでは混乱が起きるのでは!？」

「その点は全く問題ない。俺様の言葉を信じろ」

「了解致しました。此方の書状をヨーロッパ各国に回状させて頂きます」

そうして、全てのヨーロッパ諸国は一斉に同じ政治を始めた。

その不可思議さにヨーロッパも含めた全世界は盛大にこの事を取り上げた。

ヨーロッパ以外の地域では、この政策は失敗するであろうと示唆されていたが、各国の予想に反し、ヨーロッパ諸国の経済状況は異常な迄の上昇を見せ、あつという間にヨーロッパ諸国が全て同じ迄の裕福な経済状況に至った。

ヨーロッパ諸国以外の各国はこの事態をまるで神が舞い降りたかのようにだと言い、この出来事は『ヨーロッパ神的極度経済成長』と騒ぎ立てたのだった。

「ハハハッ！時は満ちた！今一度回状を送り、ヨーロッパ諸国の最高権力者を集めろ！」

「了解致しました！」

その三日後……

「諸君。集まったようだ。今回の議長はこの俺様　神埼帝が務める。今回の議論は『ヨーロッパ諸国を一つの国へと集合させる』だ。異論は無いか？」

「『異論はありません』」

全てのヨーロッパ諸国が俺の言葉に賛成した。

「ならば、俺様が統一国の代表となるが賛成か、反対か答えよ」

「『賛成』」

全ての国は俺が代表となることに同意し、俺はヨーロッパ全土の最高権力者となった。

(…名前は………そうだな。『ヨーロッパ統一帝国(EUE)』とでもしておこうとするか)

そして次の日、この事は大々的に取り上げられ、記者会見兼表明として俺も出る事となった。

俺がフランスに来てから既に四年……俺は十一歳となっていた。年齢的にまだ小五程度だ。

頭は既に大学卒業以上はある為、全く行く意味は無いのだが。

「ふう……。やっと此処まで来たか……」

「帝様。御時間となりました」

「おお、分かったぞ大統領」

「いえ。もう私はただの一介官僚ですよ」

ちなみに言うと、官僚のような奴らには全員に『不正と国に対する反逆は行つな』と集めて命令したため、腐った馬鹿官僚が出ることは無いだろう。

「さて、行くか……」

そう言つて場所に入ると、瞬間大量のシャッターの光を浴びる。良く見ればビデオカメラもあり、どうやら生中継のようだ。

「…俺様がヨーロッパ統一帝国（EUE）初代帝王…神埼帝である。今回は、貴様らの質問に答えていこうと思つている。質問は？」

「はい！三権統一したということですが、それでは政治があなたの思う通りになるのでは？」

「確かにその通りだ。…が、俺様が無茶な内容を言った場合は別個に立てた『法律弾劾廷』がある為、心配は無用だ」

その後も俺は質問に答え続けた……。

（人吉side）

今日は、めだかちゃんと一緒に飯を食べに来ていた。

「なあめだかちゃん？」

「どうした善吉？」

「……帝のヤツ今頃どうしてるかな？」

「…さあな。けど、いつかまた帰ってくると私は信じているぞ？」

そんな事を話ながらも、俺達はジュースを飲みながら、店に付いていたテレビをふと見る。

『昨日のヨーロッパ首脳会議で、ヨーロッパが統一国となる事が表明されました』

「最近ヨーロッパって随分変な事ばっかだよな？」

「…帝がやったのかも知れないな？」

「ハハハッ！めだかちゃん！流石にソレはねえって！」

そう言いながら俺はコーラを飲む。

『現在フランスのパリと生中継で繋がっています。パリの三沢さん』

『はい！此方三沢です。あっ！新しい最高権力者が来たみたいですよ！』

俺はポーツとコーラを飲みながら、テレビの報道を見る。

『…俺様がヨーロッパ統一帝国（EUE）初代帝王…神埼帝である。今回は、貴様らの質問に答えていこうと思っている。質問は？』

「ブホッ!？」

俺はコーラを口から吐き出し、その上かなり噎むせた。

「オイオイ……!?!マジで帝がやってたのかよ!？」

俺はふとめだかちゃんを見る。

めだかちゃんは自分で言うっておきながら、放心していた。

（そりゃあビックリするよ…ってか帝デビルかっけえ!）

そんな意味分からん事を考える善吉であった。

）end（

「終わったか……」

俺は疲れきった表情で、椅子に凭もたれかかった。

「お疲れ様です帝様」

「ああ、ありがとう」

(さて、次は何処を統一しようか……。ってか、アイツラ元気にしてっかな？…)

そう思いながら俺は、次なる計画をたてるのだった…。

第三帝 ヨーロッパ統一帝国（後書き）

素晴らしき内政チート！

政治をMAX99のパラメーターで表すならError（表示不可）ですな！

何しても、全て上がるという恐ろしさ！

かつ、人望もError（表示不可）並だから、民の信頼も変わらん！

帝にはユーラシア大陸（日本以外）の全土を支配させるつもりです！

次で帝国完成かな！

つと、次も見えてくれるとありがたいです！

PS・帝国の名前を応募してたりします！出来たら、感想に書いてくれると有り難いです！

第四帝 人材追加（前書き）

うう…。

帝国名が思い付かない……。

ってワケで少し人材を増やしてみました。
オリキャラは原作では出す気あんま無いです。
帝国の管理をさせるつもりですので。

第四帝 人材追加

表明から一週間後…。

ヨーロッパ全土を治めた俺の元にロシアを代表としたユーラシア大陸全土の国（日本を除く）とアメリカ、カナダ、メキシコ等北アメリカ大陸全土の国が顔合わせをしようという書状が来た。

「ハハハッ！神は俺様にとことん味方しているようだな！大統領！」

「…もう大統領ありません。返事は如何致しましょうか？」

「勿論参加だ！」

「了解致しました」

そう言つて大統領（もう大統領ではない）は返事を書くために去つていった。

「さて、俺様はどうしようか…」

そう言いながら俺は地図を広げ、領土を確認する。
因みに、三日ほど前に俺の支持率が出た結果は100%であった。
有り得ない結果にこれもまた世界全土に取り上げられた。
意見の中には「帝王様はまだ若いのだから、年相応に学校で楽しんで
も良いと思う」とかいうのも割とあつたみたいだが。

「ん?.....」

俺は一つの都市を凝視した。

「.....リヒテンシュタイン.....か」

何故かリヒテンシュタインに俺が求めるような.....そんな存在がい
る気がした。

「向かってみるか」

俺は即座に行動を開始し、単身リヒテンシュタインへと出発した。

そして、リヒテンシュタインの首都ファドゥーツに着き.....
補足しておくとしヒテンシュタインとはオーストリアとスイスの間

にある物凄く小さな国である。多分バチカンの次に小さいだろう。

「感覚で行くしかあるまいな……」

俺は自分の勘を信じ、俺が求めるモノがあるだろう所に歩き出した。

「ム……。こちら側か？」

俺は感覚だけを頼りにどんどん道を進んでいく。

「……………アイツか……」

其処には、二人組の男女がいた。

女の方は、腰に色々な機械を設備する為の道具をベルトみたいなの
に差して巻き付け、男の方はその手足を血に染め、下に這いつくば
ってる人間を踏みつけていた。

二人とも俺と同年齢くらいに見えた。

「た、助け……………」

「るせーよバーカ。ったく、俺にケンカ売りやがってよオ？やっぱ
アレだよなア？全殺しにしねエとなア」

「流石にソレはあかんで。まあほどほどにしいや？」

とか言っつて、その男は足を振り上げ、踵落としをしようとしていた。

「……ハア……しかたねえか。民を守るのは王の務めだしな」

そう言いつつ、俺はその男の足を掴み、投げ捨てた。

「うおッ!?!」

「ったく、暴れすぎだ……。……おい。お前らさっさと行け。邪魔だ」

「……て、帝王様!?!あ、ありがとうございます!?!」「」

そう言っつて、ソイツラは足を引き摺り、手から血をダラダラ流しながら逃げていった。

「……ンだよテメー……。邪魔しやがってよオ?死ぬかア?」

「お断りだ。俺様は神埼帝と言っ。お前らは？」

「あアン？俺は天瀬大和だア」

「ウチは天山嘉穂てんざん かほっちゅーんや。よろしゅーな」

(……日本人か？)

「ああ。お前らは旅行者か？」

「アアン？んなワケねエだろーが」

「ウチらは、此方で生まれたんや」

完全にケンカ腰の大和とかいうヤツとは違い、嘉穂とか名乗ってた女は割と友好的だった。

「そうか」

「ってかよオ？テメーも邪魔したんだから死んどけよ！」

そう言い、いきなりかなりの速度で蹴りを放ってくるが、俺は後ろに飛び退きソレを避けた。

「いきなり何すんだよテメエ」

「アア？避けやがったのかア？クツ…クククツ！良いぜエ。楽しいじゃねエか！異常に逆らった報いっつーのをやってやんぜエ！」

俺は普段から体を鍛え、大概のヤツには負ける気がしなかったのだが、その大和とかいうヤツはかなり強く僅かにだが押されてきていた。

「どうしたんだア？防戦一方だなア？オイ俺を楽しませろよ！！」

「うるせえよ戦闘狂が…。仕方ねえな…。俺様は最強に限り無く近い肉体を持っている」

俺は自分に暗示をかけ、ソイツと相対する。

「アア？頭沸いてんじゃないのかア？なに誇大評価してやがんだア？」

「まあ、行くぜ？」

俺は、直ぐ様全力でソイツを殴り付ける。
無理な駆動でかなり筋が疲労してしまっただが…。

「グハアツ!？」

「はあ…。まだまだ鍛練が足らねえ……」

今の一瞬だけでも俺の筋は結構疲労してしまった。
多分、この状態を保てるのは最高5分程度だろう。

「て…：テメーも異常アブノーマルなのか……？」

「まあ、戦闘系じゃねえがな」

「そつかよ…：。なら、全力で叩き潰す!!」

刹那、ソイツの姿がブレ、その瞬間俺は殴られていた。

「なツ!?!……は、速いな!」

そう言っつてソイツを見ると、ソイツの服はぼろぼろになって、筋もズタズタになっていた。

俺はと言え、今の一撃で口を切り、口の中が血の味しかしなくなっていた。

「……………ペツ！俺様もキツくなってきたし、次で終わらすぞ」

俺は口の中に溜まった血を吐き出し、ソイツに告げた。

「ああ、最後に全力で来やがれよオ！」

刹那、俺とソイツの体が同時にブレ、その間に互いに数十発拳を交わす。

「……………ハア……………ハア……………。負けたぜエ。テメエつえエなア？」

「……………俺はまだまだだ。コレを使っつても筋がやらねえようにしねえとな……………」

俺は血塗れの手を振りながら言っつ。

何故かその間にソイツは怪我が全快していた。

「何だと!? なら、俺は帝王と戦り合つたの…」「そつだな」…「やつちまつたアアアア! ヤベエ! コレ死刑だつて!？」

「なんや。短い間やつたけど、天国でも達者でな…」

そつ言つて、哀愁漂つ感じで肩を叩いていた。
…薄情だな…。

「いや、やらねえよ。つと、お前らアブノーマルなんだよな?」

「そつだぜエ! 俺は戦闘特化!」

「ウチは開発…まあ、研究特化やな」

戦闘と研究…。

確かに今EUEに最も足りない要素の一つだな。

「…お前ら。俺の下につかないか?」

「んー。ええよー。帝っちが言つんやつたら手伝つちやるわー」

(帝っち?)

「俺も良いぜエ！帝には負けちまったし、割と楽しそうだしなア！」

二人とも快諾してくれ、俺はEUEの更なる発展の機会を得ることが出来た。

「さて、帰るとするか」

「分かったわー！」

「ああ行くぜ帝！」

そう言つて俺達は大統領の家に帰っていった。
余談だが、俺が血塗れで帰ってきた為、大統領のヤツが大和を殺そうとしたりしていた。

(俺様が世界を統治する日は近いなあ?)

そう思いながら、俺は四日後に決まった顔合わせの日を期待するのだった。

第四帝 人材追加（後書き）

一応補足の説明！

名前

あまがせ やまと
天瀬大和

見た目 金髪のツンツンで、金色のつり目

完全に戦闘特化で頭は凄くバカ。
異常性は「治癒能力」と「戦闘力」と「反射神経」。
だが、反射神経は高千穂仕様並では無く、凄く良いね。程度。
治癒能力は腕が千切れたって治る程。
再生の場面はピッ 口みたい。

名前

てんざん かほ
天山嘉穂

見た目 茶髪のアート。目は水色で若干つり目。

基本的に研究施設に籠る事が多い。大和とは幼なじみみたいなもの。
異常性は「開発」「研究」で、新しいモノを作ったり、新しいモノ
を調べるのが好き。

第五帝 帝国の進化（前書き）

次からやつと！やつと原作キャラを！

日本よ！私は帰ってきた！風な感じかな？

名瀬ちゃん出してー！

ってワケで、多分行く中学は名瀬ちゃんのトコかな？

名瀬ちゃんの中学は女子校だけど、別に共学にすれば良いよね？

だって、めだかの中学だと球磨川と戦わなくちゃいけないし……。

あの人と戦うのは一回だけで良いよ……

第五帝 帝国の進化

そして四日が経ち、顔合わせの日となった。

「御時間になりました、帝様」

「ああ、分かった。今すぐ向かおう」

大統領に呼ばれ、俺は会議の地……モスクワへとジェット機で向かった。

ちなみに初めて聞いたが、大統領の名前はグランツ・アーデジオンと言っらしい。名前を聞いた時には初めて聞いた名前に心底驚いたものだ。

そして、モスクワに着き……

「ほお……。此処がモスクワか……」

モスクワはやはりと言っべきかかなり人が多かった。

特に報道陣が多く、俺が通った時も最早前が見えなくなるくらいシヤッターを焚かれた。

「……そんなに撮ってどうするんだよ……」

「それは帝様がとても有名だからですよ」

「ガキだからか？」

そう言うとは何故だか溜め息を吐かれた。
変な事を言ったか？

「帝様は大変世間で有名となっておりますよ。コレも帝様の才能と言ったところだと思います」

「才能……ねえ。ま、ありがとよグランツ」

「帝様に感謝されるなど恐悦至極でございます」

そう言って、頭を下げていた。

ついでに言うと、呼び方が変わったのはグランツの要望だったりする。

大統領じゃないのに大統領と呼ばれるのは凄くむず痒かったそうだ。

「さて、向かうぞ」

「ハッ！」

そうして、顔合わせが始まり……。

「さて諸君！本日は此処…モスクワに御足労戴き真に感謝しよう。
私はロシア連邦大統領…ヨハネ・ワルターと言つ。以後お見知り置
きを」

その瞬間、全ての国が拍手した。

「さて、本日の会合の目的はヨーロッパ統一帝国新帝王…神埼帝殿。
貴方の挨拶と今後の友好関係を築く為なのです。神埼殿。挨拶をお
願ひしたい」

「了解した。俺様がEUEの帝王となった神埼帝だ。さて、今回俺
様もお前らと話したい事がある。」

俺は自らの力を引き出し、そして言葉を紡ぎ出した。

「『俺様に服従し、自らの国の政権を明け渡せ。ソレを個々で俺様の元に来、契約していけ』」

「『了解致しました、我等が主よ』」

各国の首脳達は跪ひざまづき、俺の命令を受け入れた。

その後、やはり同様に俺に対し、完全な忠誠を誓わせ、合図まで待てと命令しておいた。

ソレから五分後、俺達は解散したのだった。

「……さて、各国の経済状況を改めねば……。更には紛争地域は紛争を終わらせねば……」

ソレから一ヶ月程俺は政治案を考え、考え付いた時点でグランツを呼び出した。

「グランツ！この政治案をそれぞれ指定の国に回状してくれ！」

「畏まりました！帝様の御心のままに！」

何故だか新しい返事の仕方です返事をしてきた。

「グランツ？お前もしかして今までの返事は飽きたのか？」

「ハイ！飽きてしまいました！」

スッパリと飽きたと言い切るグランツに俺は苦笑するしかなかった。

「まあ良い……。とりあえず頼んだぞ」

「畏まりました！」

そう言ってグランツは去っていった……。

(アイツ……性格変わったのかな……)

そう思っていたら、急にドアが開いた。

「帝っち〜!!」

「ああ。嘉穂か。どうしたんだ？」

「ええもん出来たでちいっと見てみてえな!」

そう言うと、直ぐ様俺は腕を掴まれ、引き摺られていった。

(コイツこんなに力有ったっけか?)

そう思いながら連れて行かれると、其処には一見何ら普通のモノと変わらないジェット機が有った。

違う所と言えば、黒一色に染められてる事くらいだろうか。

(……ステルス機みたいだな……。まさかとは思つが……)

「これはなあ! 最高速度で行けば日本まで僅か一時間で着けるんや! 極超音速流くらいの速さやな!」

「それってどのくらいだ?」

「うーん。大気圏通過時のロケットの周りの流れ並みやと思うんやけどなあ?」

(説明が微妙過ぎて分からない……)

「時速で言うところのくらいだ?」

「マッハ10くらい出るんとちゃうん?」

何故か曖昧に答える嘉穂を見て、多少眉がひくついた俺だった。

……ちなみにこの後、ネズミを使っての実験も成功し、重力の問題は大丈夫で誰でも乗れるらしい。

…ただ、景色は全く分からないらしいが。

そして、俺も十二歳になる頃……ようやく紛争も終らせ、満を持して俺は回状をまた送った。

今や、俺の統治するEUEは最大の経済力を有し、更には多大な独自保有の機械類を所持していた。

「帝様!ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の国々の全てが帝様に全ての政権・領土権を譲渡するとの表明・書状が来ました!」

「そうか!グランツよ!今すぐ記者を集める!この事を会見し、帝

国の領土が増えた事を表明するぞ！」

その一日後……俺は会見の準備を整えていた。
陸地としては半分近くの陸地を全て自らの手中にしたため、俺は気分がとても良くなっていた。

「御時間になりました、帝様！」

「ああグランツ。…俺様に付いてきてくれて感謝するぞ」

「私は帝様の配下です。帝様の目的は私の目的。帝様に仕える事こそが私の生きる理由なのです。嫌と言われても私は貴方に一生付いて行きますよ。…それに帝様の目的はまだ終わってはいないのでしよう？」

「ハハハッ！確かにその通りだな！」

そんな事をグランツと話し、俺は記者達の元に向かった。

「さて、お集まり戴き感謝しよう」

「今回は何の会見をするのですか？」

記者の一人が俺に聞く。

（あ………帝国名をどうしようか……。ウム………ガンツライヒ………とでもするか……）

「さて、この度俺様が統治するEUEだが、昨日日本を除くユーラシア大陸諸国、北アメリカ大陸全土を領土下に置き、超大国………ガンツライヒ帝国となった。此度はその報告を行いに来た所存だ」

「なら最近各国が急に経済的に良くなっていったのは貴方の政略の為なのですか！」

「そつだ」

と、そんな感じで俺は質問に答えていった……。
後に、このニュースは全世界で大々的に取り扱われたのだった。

「毎回記者会見と言うのは疲れるな………」

「お疲れ様です帝様」

俺はコーヒー（ブラック）を飲みながら、少し愚痴を漏らす。

「ああ。取り敢えずはしばらく領土拡大は止めておこう」

「ならば何をするのですか？」

「ああ。久し振りに日本に帰ろうと思ってな。留守の間はグランツと大和と嘉穂に任せる。グランツ……期待しているからな？」

「ハッ！お任せ下さい！」

グランツはそう言って片膝を着き、頭を下げている。

（めだかちゃんと善吉……元気かな？……覚えてくれていると良いんだがな……）

「なら準備をした後に行くとする」

「了解致しました！」

俺は期待と不安を五分五分にしなから、懐かしき幼馴染み達に会え
ると期待するのだった……。

第五帝 帝国の進化（後書き）

ガンツライヒの意味はドイツ語で
ガンツganツz 『全体・完全な・とつても』
ライヒReヒch 『国』

って意味だつたと思います。
要は『完全な国』ですね。

うーん。

中々に苦しい名前……。

つと、次も見てくれると有りがたいです！

第六帝 日本への帰省（前書き）

時間軸をミスったからちよつと修正を加えました。

第六帝 日本への帰省

次の日。

俺は前に嘉穂が発明したステルス機のようなジェット機に乗り込み、日本に向かっていった。

「確かに……全く景色が見えぬな……」

俺は、ジェット機の窓から景色を見るが、全く景色が見えなかった。見えるのは、只の線だけで、俺はその景色を見るのは無意味と判断し、静かに待っていた。

(…めだかちゃんも善吉も俺様の事忘れてねえよな？会った時に「誰だ？」とか言われると、かなり悲しくなるんだが………)

意外にも俺は心配と思いつつも、日本に向かっていった。

そして、空港に着くと……

大量のフラッシュに出迎えられた。ここまでシャッターを焚かれると、何故だか俺が犯罪者のような気がしてくる。

「何なんだ？」

「いきなりの来日ですが目的は！」

そう言っつてマイクを突きつけられた。

「俺様は日本で生まれた。だから、ただの帰国だ」

そう言っつて俺は更に進んでいく。

「会いたい人などはいますか！」

「ああ。幼馴染み二人に会いに来た」

「女性ですか、男性ですか！」

「一人は男性で一人は女性だ」

そうこつ言っつている間に俺は空港の玄関から出て、歩き始める。
今日の服装はそこら辺に普通にいそつな黒を基調とした服だからあ

んまり目立たない筈だ。

……そう思っていたのに……。

何故だか俺は異様に目立っていた。

「何故だ？身長なのか？」

俺は年齢的に中二なのに関わらず、既に身長は168？になっていた。

…それが原因だと思っていたんだが、何故だか俺が顔の向きを変える度にその正面にいた女性は俺を指差して跳び跳ねたりしていた。

「……まさか俺が帝王だからか？」

そんな事を考えながらも、俺は善吉とめだかちゃんを探し歩いていった。

「……見付からんな……」

五分ほど探し歩くが、一向にめだかちゃん達が見付からない。

「仕方ない。誰かに聞こうか……」

拉致があかないと思いつくとすると、一瞬善吉みたいな人が目に入った。

……ただし、残念な中学デビューした感じだみたいだが。

「善吉か？……行くか」

俺はそのまま善吉を追い掛けると、善吉？がいた。

「……おい。善吉か？」

「ああ？誰だよ……って、帝！いつ帰って来てたんだ！？」

見た目は随分変わっていたが、やはり善吉だったようだ。

「さっきだ。久しいな善吉。随分……奇抜になったな」

「久し振り！……って、それ全く誉めてねえよな！？いや、コレデビルかっけえだろ？」

「？デビル……いや、そうは思わんが」

「畜生！帝にはコレの良さが分からないのか！？」

そう言って手をつき、いじけていたが、急に立ち上がり話し出した。

「そつえば帝？めだかちゃんにはもう会ったのか？」

「いや、まだだが……」

そう言っくと、善吉に盛大に溜め息をつかれた。

「多分早く行った方が良いぜ？テレビの取材とか来てたる？」

「ん？ああ、そつえば来てたな。何であんなに来てたんだ？」

俺は最近の疑問を聞いてみた。

「いや、今日本じゃ帝は人気俳優並みに人気があつてよ。その帝の来日だし取り上げるだろ。っと、そうじゃなくてよ。めだかちゃんに出てから一回も連絡して無かつただろ？」

「そつえば……。善吉にはしたんだけどなあ」

昨日俺は準備の時に「連絡しなくては」と急に思い、善吉にだけメールを送っていた。

「めだかちゃんにも送れよ……」

「いや、こついつのはサプライズが良いかと思ってな」

「バカだろ帝……。取り敢えずさつさとめだかちゃんに会いに行けよ？」

「ああ、分かった」

そう言っただけ俺は善吉と別れ、まためだかちゃんを探し出した。

「何でバカ呼ばわりされたんだ？まあ取り敢えずめだかちゃんを探すか……」

そうして俺はまためだかちゃんを探し出した。

(まあ取り敢えず覚えてくれてて助かったな……)

そう考えつつ探す事一時間……俺はやつとめだかちゃんを発見した。

「あ。めだかちゃん発見。……久しいな！めだかちゃん！」

そう言っつて俺は肩を叩く。

「ん？……帝……か？」

「そつだ。それ以外の何に見える？」

そつ言っつて、やれやれといった風に手を広げる。

「……帝？何故……善吉には連絡し、私には連絡し無かつた？」

何故だか知らないが、激しい威圧感を持って返事を返された。

「あはははは……。サプライズと思つて……」

「……次からは、余計な事を考えずに連絡するんだな」

「……申し訳ない……」

俺は、その威圧感に耐えきれず、頭を下げた。

端から見れば、帝王の俺が頭を下げてるのはおかしい光景であろう。

「……取り敢えず……おかえり！」

そう言って、急に抱き着かれた。

「うおっ!?!」

当然めだかちゃんも俺がフランスに旅立ったときよりも更に女性っぽくなっているワケで、俺は突然の出来事に事態を把握できずにいたが、把握すると同時に俺の顔は赤く染まった。

「ちよっ!?!めだかちゃん!?!……離れてくれないか?」

「……ああ、分かった。帝はしばらく此方に滞在するのか?」

「ああ。しばらくは此方にいる気だ」

めだかちゃんとは離れてくれたが、まだ俺の顔は多少赤かった。

「…………ふう……。取り敢えずは中学は此方で通うつもりだ」

「何処に行くんだ？」

「俺様に通うのは確かめだかちゃん達とは違う中学だった筈だ」

そんな感じで話し、俺はめだかちゃんと別れた。

「さて、中学編入の日時でも聞くか」

そう言って、俺は編入先の中学に電話した。

『もしもし』

「神埼帝だが、編入の日時を教えてください」

『あっ！分かりました。…………えっと、編入は明日からになりますね』

「了解した。…俺様の事は生徒には身分を伝えるな」

『でも…』

電話先の校長らしきヤツは言葉を詰まらせ、多少狼狽えてるようだった。

「『でも』では無く、絶対に伝えるな。居辛くなってしまっからな」

『……………分かりました。教師にそのように伝えておきます』

「では俺様はコレにて切らせてもらっ」

『それでは』

そう言って、俺は電話を切り、明日の準備の為に早々に帰るのだった。

第六帝 日本への帰省（後書き）

ジュン「さて、気分で始めました！お話コーナー！」

帝「……誰だお前は？」

ジュン「酷いなー帝っち。俺は作者さんなんだぜ？」

帝「そうかよ。で、何のようだ？」

ジュン「質問1！何でめだかちゃんと善吉のメアド知ってんの？」

帝「俺様の帝王としての力を使えばあれぐらい、いとも容易い」

ジュン「……それってプライバシー無視してね？」

帝「煩い。知り合いだから良いんだよ」

ジュン「いや、全然良くないよ!？」

帝「煩い……。『黙れ』」

ジュン「……………」

帝「黙ったか。さて、作者も黙ったし、今回は此処で終わりだな。次回も見えてくれると俺様も嬉しく思う」

第七帝 学校への転入（前書き）

今回は学校に転入します。

何かグダグダな気がする……。

あ、先生をオリキャラとして出しました。
名も無き先生 A とか色々ダメな気がしたので……。

第七帝 学校への転入

次の日、俺は転入する手筈の中学に向かっていった。

「さて、どのような人間がいるのだろうか……」

そうこうしている間に、目的の中学に着き、俺は職員室に入ったのだが……。

「本日転入予定の神埼帝だが……」

「無理い！無理でしゅよお！」

何故だか異様な焦り方を見せる二十歳くらいの女性教師がいた。

「……どうなっている？」

俺は職員室の扉で立ち尽くすのだった。

〈教師 side〉

私が学校に來ると、皆さんがもう來ていて會議を開いてました。

「あのー……。皆さんどうしたんですか？」

「ああ。国東先生くにのみさき。いや、今転入生を何処のクラスに編入させるかの話し合いをしてしましてね」

「……………そうだ。国東先生。貴女のクラスに編入させてくれませんか？」

「え？うーん……………？」

私の受け持つてるクラスには名瀬さんという変わった人がいます。名瀬さんは私から見ても明確に虐められてると思うのだけど、本人は全く気にしていないみたいなんです。だから、私がやんわり注意してもクラスの皆さんは虐めを止められませんか。

(……………転入生が来てくれたら、それも変わってくれるかなあ……………)

私はそう思って、答えを返す事にしました。

「はい。分かりました。良いですよお？」

「はい。今の言伝で。皆さん聞いたわね？」

「」「はい！」「」

(何でこんなに団結してるのかなあ?)

「それじゃ、ガンツライヒ帝国帝王…神埼帝様が転入生だから、よろしくね？」

「ふええ？」

何だかこの場に存在するワケがない人の名前を聞いた気がします。

え……………？

ガンツライヒ帝国……………？

「えええええ！？今なんて言ったんですか!？」

「だから、ガンツライヒ帝国帝王…神埼帝様が転入生よ？」

その瞬間、私の周りの時間が止まりました。

「え？……う…そ…」

「嘘じゃないわ」

事態を把握した私はとっても重大な役目を与えられた事に気付きました。

「本日転入予定の神埼帝だが………」

「無理い！無理でしゅよお！」

私が言う前に誰か喋っていた気がしましたが、私にはそんな事を考える暇はありませんでした……。

～ e n d ～

俺は、さっき異常なまでに焦っていた女性が落ち着いてから、口を開いた。

「……転入する予定になっていた筈だが？」

「申し訳ありません。此方の国東先生に着いていってもらえますか？……国東先生。よろしくね？」

「ひゃ、ひゃいいい！」

国東という先生は校長の言葉を聞くと、肩をビクリとして涙目で返事をしていた。

「……大丈夫か？」

「ひゃい！らいじょうぶねす！」

……この女……酔ってるのか？

「……酔ってるのか？」

「ち、違います！」

どうやら酔ってはいなかったようだ。

国東という先生は、必死に深呼吸をして、落ち着いたのか話し掛けてきた。

「あ、あの……帝様……？着いてきて下さいね……？」

随分おどおどしながら、俺の様子を伺うように言ってきた。

「……様付けは止める。今はただの一介中学生となんら変わらん」

「か、変わりますよお……。私が……呼び捨てなんかで呼んだら……
……ヒイツ！？」

そう言ってまた急に肩を震わせていた。

(……………「コイツ……大丈夫かよ……………」)

「呼び捨てで呼べと言っている。拒否権は無い。それに俺様に対しては、普通に男子生徒に接するのと同じ感じにする」

「いや、でも……」「分かったか?」「ひゃいひゃい!」

そうこう言ってる間に、教室に着いたようだ。

「あの…それじゃ、呼ぶからちょっと待ってて下さいね…?」

「分かっている。さっさと行け」

「ひゃっ、ひゃい!」

そう言ってそそくさと教室の中に入っていった。

『皆さん席に着いてくださーい!あの!今日は転入生が来ますので、挨拶をしてもらおうと思います。あのお、入ってください…?』

そんな感じの言葉が聞こえてきた為、俺は教室の中に入った。

「失礼する。本日から転入する事となった神埼帝だ。以後よろしく頼む」

「……ええええ!?」「……」

挨拶をした瞬間、有り得ない程の驚愕の声が響いた。

その中に、唯一動じない女子生徒がいた。

その生徒の周りは、異常なまでにモノやらなんやらがぶちまけられていた。

それに、紙袋を頭に被っていたのもかなり印象的だった。

(挨拶に行くでしょう)

「あの……。それじゃ、神崎くんには……」「空いてる席に勝手に座らしてもらおう」「……分かりました……」

俺の今の興味は、最早その女性にしか無く、俺はその女性の近くの席に座り、後ろに振り返った。

「素晴らしいな!名前を聞かせてはもらえないか?」

「……なんでだよ」

「俺様が知りたいからだ!知的好奇心の賜物とでも言うておこうか!」

「……意味わかんねー……。……名瀬天歌だよ」

俺が話している間、周りの生徒達は全く状況に着いていけないようだった。

「名瀬天歌か！良い名だ！俺様の名前は神埼帝という！」

「……知ってる。で、何のようだよ」

「名瀬天歌！お前の事を知りたい！」

「……わけわかんねー」

そう言っつて、名瀬天歌は紙袋に開いた穴から怪訝そうに俺を見ていた。

「まあ多少なりともその名は知っているがな。バイオテクノロジーの世界的権威……だろ？」

「……まー、その通りだよ」

名瀬は興味が無さそうに相槌をした。

「俺様を被験体として、使ってくれ。その代わりと言っては何だが、俺様の友となってはくれぬか？」

「……わけわかんねー……。：が、まー良いぜ。資金面も出してくれよ」

「その点は心配するな。俺からすれば、億単位の投資など、雑作もない」

友とは言い難い話の内容だが、名瀬からすればこのくらいの事はせねば俺を近くにおこつとはしないだろう。

……まあ、勘だが。

「と、取り敢えず授業を始めますよお！」

「ムッ……！授業か……。じゃあまた後でな、名瀬ちゃん」

「……………」

名瀬ちゃんに手を振るが、名瀬ちゃんは挨拶を返してはくれなかった。

まあ……………少しずつ仲良くなれば良いか……………。

そう思いながら俺は、授業を受けるのだった…。

第七帝 学校への転入（後書き）

ジュン「今回で第二回だぜ！今回のゲストは……国東先生だ！」

国東「は、はい！え、えっと……何のようでしょうか？」

ジュン「自己紹介タイムだアアア！」

国東「ヒッ……！……何ですかあ……？自己紹介？誰がするんですか？」

ジュン「君だよ君！」

国東「へ？私？えと……国東夢可くにとう ゆめかって言います。えと……身長は160？で、血液型はAB型です」

ジュン「体重は？」

国東「えと……体重は……って何言わそうとしてるんですかあ！」

バキツ！

ジュン「グハツ……！ ナイスストレート……！ じゃないわあ！ 俺はMじゃねえ！ Sだ！」

国東「それって堂々と言うこと何ですか……？」

ジュン「うん！ つとじゃあ、国東ちゃんの見た目を言つかね！ えつと見た目は……けいおん！ の溲だね！」

国東「それって誰ですかあ……？」

ジュン「おつと失敬！ メタ発言しちゃった！……黒髪の美女だね。まあ、身長は小さめだけど」

国東「……美女ですかあ……／／」

ジュン「あ、もう時間だし……。国東ちゃん挨拶！」

国東「あ、はい！ えと……次回も見てくださいね……？」

「...」

第八帝 とある日（前書き）

久しぶりの投稿ですな……。

言い訳ですけど、学校行事があつて手がつけられ無かつたんです…

…orz

なるべく早めに次の話を書こうと思います。

あと、何かうちの家族が38。以上の熱を出してたので熱かからな
いか冷や冷やします…

第八帝 とある日

転校してから二週間……。

俺は既に簡単すぎる中学の勉強に飽々してきていた。元の学力を含め、帝王学や物理学、哲学等さまざまな勉強を俺はしていたため、中学程度の勉強は俺にとってはあまりにも簡単すぎたのだ。

「……つもらん。この程度の勉強をする羽目になるとはな」

そうばやきながらも、俺は今日も学校に向かっていた。

飽きているにも関わらず学校に通学しているのは、ひとえに名瀬という人間が、一体どのような考え、思想を持っているのか知りたいと言つのもあるだろう。

また、俺たちアブノーマルは同類がほぼ大体好きだろう。

それは親愛であったり、友愛であったり、恋であったり、または純粹な愛であったりと、さまざまな種類がある。

俺は、どの感情かは図りかねるが、多分名瀬が好きなんだろう。

それは、めだかちゃんや大和、嘉穂等のアブノーマルも同様だ。

自らが他と違うと理解しているからこそ、自らの同類を欲し、自らの同類を見つけると、気になったりするのだろう。

……まあ、大和は確実に友愛か親愛だろうが。

そんな戯れ言を考えているうちに学校に着いたようで、俺は自らの席へと座り込んだ。

「名瀬、おはよう」

「……」

名瀬はなんだかよく分からない本を右手に持っていた。

…中身はどうやら、人の殺害方法についての本のようだ。

そんな本が存在する事が甚だ理解できないが、現に目の前に存在するのだから、理解するしか無い。

因みに呼び方の面は、『名瀬ちゃん』と呼んで見たのは良いが、『名瀬』の方がしっくり来たためそう呼んでいるのだ。

「名瀬。その本……面白いか？良かったら、貸してはくれないか？」

「……なんだよ読んでーのか。ほら」

そう言つて、名瀬はその本を貸してくれた。

タイトルは……『殺害方法の美学』。

……美学があるのか疑問だが、何も言わないでおこう。

「良いのか？名瀬もまだ読んでいる最中だろう？」

「……さっき読み終わったから別にいいんだよ」

「そうか。ありがとう」

と、いう感じにその本を借り受けたら、教師が入ってきた。

その一時間目は、俺はずっと『殺害方法の美学』を読んでいた。

読んでいる最中、教師がその光景をまじまじと見ていたが、俺は無視して延々と読んでいた。

そして、授業が終わり……。

「ありがとう、名瀬。結構面白かったよ」

俺とは違う観点、思想から描かれた作品だった為、俺にもそれなりに楽しめた。

「…そうかよ」

「そういえば、俺様を被験者とする実験はしないのか？」

「……とりあえず、検査をしてからな」

そう話していたら、チャイムが鳴った。
このあと、二時間目から六時間目までは小指で逆立ち腕立て伏せを
延々としていた。
そして放課後……………。

「……………おい。検査をしに行くぞ」

「分かった。今向かう」

少しかいてしまった汗を拭いながら、俺は名瀬についていった。

「そう言えば何処に行くんだ？」

ふと疑問に思い、俺は名瀬に質問した。

「……………ああ。俺のラボだ」

「ラボがあんのか。どこら辺だ？」

「……………もうすぐ着くぜ」

名瀬がそう言ってから5分後……。

「……着いたぜ」

「へえ。割と普通だな」

「……どついつ予想してたんだよ」

「こつ…マッドサイエンティストな感じだな」

俺は、予想よりはるかにましな見た目をしたラボに驚きを隠せなかった。

「……そうかよ。まあ、入るぞ」

「分かった」

そうして移動し……

「やっぱりマッドサイエンティストじゃねえか……」

ラボの中は、色々な器具や見た事の無い道具、よく分からない液体で埋め尽くされていた。

「……さっさと検査するぞ」

「おお、分かった」

検査を開始し……………。

「……………もういいぜ」

「お。終わったか」

数時間の検査が終わり、ようやく俺は検査から解放された。
俺が自由を満喫している最中、名瀬は結果用紙に目を通していた。

「……ん？名瀬。それ試験結果か？」

「……ああ。そーだよ」

「すまない。俺様も見せて貰って良いか？」

「……お前の結果なんだから勝手にすればいいじゃねえか」

そう言って、書類をこちらに向けてきた。

「ん。ありがとう」

俺は結果に目を通し……

「名瀬から見て、この結果はどうだ？」

とりあえず、名瀬に質問する事にした。

「……アブノーマルにしちゃバランスが取れてる上に、身体能力が高いと思っぜ。能力の面は知らねーがよ」

「お褒めに預かり光栄だな？俺様の力は人の上に立つための力……って感じだ」

「……そうかよ。まあ、そのうちじっくり調へさせてもらおうぜ」

「その時は気軽に呼んでくれよ？」

「……分かったぜ」

その後、俺は名瀬に話しかけ続け、しばらくした後、帰宅するのだった。

第八帝 とある日（後書き）

ジュン「お久しぶりでーすっ！」

帝「…五月蠅い。黙れ」

ゴツ！

ジュン「グホアッ！？めっさ痛いんですが!？」

帝「久しぶりだな。サボり作者」

ジュン「いや、ちやいますよ!?!いや、俺学校の行事あつたんやも
ん!」

帝「『もん』とかキシヨイんだよ!」

バコツ！

ジュン「ゲヘッ!? 口調でやられるとか、ガチ理不尽やないかい
!」

帝「お前口調変わってるじゃねえか」

ジュン「いやいや、これがリアルの口調なんよね。まあ、諦める」

帝「何がだ! 第一偉そうで腹が立つ」

ジュン「ガチ酷し! 泣くし! 俺泣くし!」

帝「いい加減にしろ! 『黙れ』」

ジュン「ちくしょ……………」

帝「ようやく黙ったか。それでは、次も見てくれると有難い。それ
では、次回!」

第九帝 普通人古賀いたみ（前書き）

ネ、ネタが出来ない…。

なので、ちょっとキング リムゾンさせてもらいました。

こんな駄文を待っていてくれる方々がいるとは、マジで遺憾な思いです。

れおぼんさん、紅蓮さん、なおさん。

三人にはホント感謝です！

第九帝 普通人古賀いたみ

それから、あつという間に中三になった…。

その間、何事もなく……いや、何事もなくと言えば、おかしいか。特に俺様という存在を揺るがすような事は起きず、ガンツライヒ帝國も至極平和。

反乱軍も起きず、極めて平々凡々とした生活を送っていたように思う。

まあ、途中でめだかちゃんを助けに、球磨川楔と相對したのだが…、コレはまた今度話す機会があるかもしれない。

そんな日々を名瀬と過ごし、あまり変化は無いが、名瀬と仲良くなれたように思う。

あの後、数日後に能力面の検査も行われたし。

……ただ一つ、今困っている事と言えば名瀬に一度も名を呼ばれたことがないくらいか。

「おはよう名瀬」

「ああ」

今日も名瀬は本を読んでいた。

クマガが斧を持つてる表紙って凄くシユールだな。

「名瀬。頼みがあるんだが」

「なんだよ」

「俺様の名を呼んでくれないか？」

「……何でだ」

読んでた本を閉じ、机に置いて聞いてきた。

「呼んで欲しいから。これ以上の理由が存在するのか？いや、存在せぬ！」

何故だか力説してしまった。

我ながら何を熱くなっているんだろうか。

「まあいーぜ。帝……これで良いのか」

「ああ！ありがとう名瀬！」

「……わけわかんねー」

そんな朝のイベントも終わり、俺は名瀬の上らへんの天井に足一つで張り付いていた。

片足で張り付くと、やはり多少疲れる。

が、この程度の疲れは疲れと呼ばない。

まだまだこの程度なら寝ながらやってのけられるだろう。

「名瀬。誰か来てるぞ？」

「ああ、そーみたいだな」

どうやら、先程の本は漫画だったらしく、それに目を通し別になんにも無いようにしていた。

俺様と言えば、未だに天井に片足で張り付いている。

「ん？」

さっきまでクラスの戸の外にいた女がこちらに入ってきた。
後ろの奴らは呼び止めようと必死みたいだが。

入って来た女は名瀬の前に立ち、自然にか故意的にか口を開いた。

「お願い。私を実験動物にして」
めっちゃくちゃ

(フハハハハ！名瀬がバイオテクノロジーの世界的権威であるとして言っているのか？だとすれば、実に面白い！)

そうこう考えてる間に、名瀬はその女の願いを聞き届けたようだ。

「その人は？天井に張り付いてるって………忍者？」

阿呆は勘違いをする女。

「いや、コレは俺様の足の握力を使い、力業で張り付いてるだけだ」

「へえー。スゴいねー！」

「この程度容易いものだ。女。名は？」

「私は古賀いたみ！よろしくねー！あなたは？」

(古賀か。覚えておくとしよう)

名前の再確認をしつつ、俺は問いに答える事にした。

「俺様の名は神埼帝だ」

「神埼くんよろしくねー! …… って、え?」

固まる古賀。

「……もしかしてガンツライヒの神埼帝?」

「そつだ。俺様は神埼帝。ガンツライヒ帝国初代帝王だ」

「え、ええええええ!?!」

古賀は相当に驚いたようだ。
これくらいで驚くとは…。

「何でこんなトコロにいるのー!?!?」

「日本に帰省していな」

「あ、そうだった」

納得と言った顔をしていた。

「そう言えば古賀。何故お前は名瀬にあんな事言ったのだ？」

「私いつも平均身長、平均体重ジャストで、テストも全部平均点。体力測定も全国総合平均通りで。けど、言ったら何か変わる。普通じゃ出来ない事が出来ると思って」

「……………ちよつと待て。」

全部普通？おかしい。あり得ない。

そんな事態など通常なら起こりうる筈が無い出来事だ。

全部普通など通常ではあり得ない。

特に意識したとしてもそんな事象は不可能だ。

……………まさか、古賀も異常か？

異常性が『普通すぎる』事か。

それとも、異常に生りうる原石だという事か。

普通すぎるゆえに異常。

変わった存在だと言えるな。

この事実によって名瀬は実験動物にする事に承諾したのか？

アブノーマル
異常の原石だとすれば、古賀は確実に名瀬の技術により、
アブノーマル
異常へと
変わるだろう。

「どうしたの？」

古賀の声掛けで我に戻った。

「いや、多少考え事をな」

そうして、古賀が新しく友となった。

第十帝 半超人古賀

古賀いたみが名瀬の友達と、俺の友達となつてから三日後。

いつも通りに過ごしていると、携帯がふと鳴った。

着信名は「天山嘉穂」となっていたので、それによりガンツライヒで何かが起きたのだと容易に想像出来た。

「もしもし。嘉穂か」

「やゝ、久しぶりやんな〜帝っち。随分声聞いてなかった気がするわ〜」

「……異常事態じゃないのか？」

「どうしたんだ？俺様に何か用があるのであろう？」

『せやせや。兵器開発ってしても良いん？』

「……む。難しいところだな。」

作れば、民からの不信感が発生するやもしれぬし、かと言って作らねば他国から攻め入られた場合、民の安全を守りきれぬ。

民からの全幅の信頼があるならば、俺様は迷わず兵器開発に着手するべきなのであるが、生憎と俺様を信仰し、信頼を置いている者は全員ではない。

しかし、民の安全を守る事こそが王たる資格、王の義務であり務めなのだ。

故に、ここは一応着手すべきなのだろう。

しかし、核爆弾、水素爆弾などのような物は作ってはいけない。

放射能を発する兵器を作り出すなど愚の骨頂。

作るのならば、ただ単にそこにあるだけで絶対たる威圧感を放ち、戦う前に敵戦力を鎮静化出来るような物でなくては意味がない。

「分かった。良いだろう。ただし、放射能を発する兵器はならん」

『ウチはそんなん作る気ないてゝ。もっとええもん作るんやでな』

「そうか。期待しているぞ、嘉穂」

『おお。期待しといてえな！』

・・・毎度毎度元気だな。全く。

「それではまたな」

『おう、またな〜。たまには戻ってきいや〜』

「わかっている」

『ほなな〜』

そう言つと電話は切られた。

全く毎度毎度元氣過ぎる、あの元氣は一体何処から出てくるのだからか？

「神崎くん、どうしたの〜？」

「いや、少しな。少々帝国に関する電話が先程あつたのでな」

「そうなんだー。色々大変だね」

「いや、優秀な部下に任せているからそれ程大変では無いがな」

うん、グランツと嘉穂の事だな。

大和は戦いでしか使えないからな。

「そういえば、どうだ体は？未だ多少しか変わらんがそれでも前よりは良いだろう？」

古賀の体は既に多少だが名瀬の手が施された。
改造人間古賀初段階と言ったところだ。

「うん！」

「っと、名瀬は？」

電話してたから周りを見てなかったが、名瀬がいない。
ああ、コレは由々しき事態だ。
如何すべきだろうか？

「名瀬ちゃんならトイレ」では俺様は向かうぞ！」・・・いやいやいや、ダメだって神崎くん！！話聞いてた！？」

「ええい！離さんか！！俺様は俺様の気が向く時に行動するのだ！！」

「・・・いや、なんか良い事言ってるような雰囲気だしてるけどそれただの覗きだからね！？」

「俺様にはそのような事は関係無い!!」

「つてか、古賀よ！」

「力の加減が全く出来ておらんぞ!？」

「さつきから強化腕力で肩がギリギリ言ってるから!!」

「軋む!肩が軋む!痛いぞなんだかんと言つて!

「俺は身体能力の方面は普通をベースに全力で鍛え上げた人間だぞ?

「幾ら筋の密度が常人をはるかに逸脱してるとは言え、異常には及ば

ぬ力なんだからな?

「だからその手をマジで退けてくれえええ!!!!」

「分かった帝くん!」

「……うむ。良いだろう。だからその手を退けてくれ」

「離れたら行く気だよね?」

「くそっ!何故俺の考えが暴露している!？」

「つて、そうではなく!行かぬからその手を是非とも退けてくれ!!」

「行かぬと約束するから!」

「だから、その上手く力の加減も出来ない手を退けてくれ!」

「行かぬと約束しよう」

「・・・なんでこっちを直視しないのかな？」

痛いのが我慢してるからだよ！！

良い加減顔色隠すのキツイんだから、本気でやめてくれ！
その手を、その手を離してくれ！！

「分かった。古賀、俺様は行かぬと約束しよう」

精一杯の我慢でそう言う。

流石、名瀬が改造しただけある。
初回でもかなり痛い。思わず肩が粉碎したのかと思ったぐらいだ。

「うん、分かったよ」

や、やっと肩が開放された。

「古賀よ。お前は力の加減と言うものを身につけた方が良いな。今まで通常（ノーマル）だったのだから仕方がないが、その加減が出来なくてはあまりに生活が不便だ。器用さを手に入れるべきだな」

・・・ふう。肩の痺れが引いた。

「うん、分かったけど・・・どうやってするの?」

「・・・それは知らん。名瀬に聞いてくれ。俺様は鍛錬に関する事ならば答えよう。俺様は更なる高みを目指す者。故に、俺様は力の方面でも強者になるべきなのであるからな」

毎日の鍛錬は日課であり、義務だからな。

「うん、分かったよ」

「まあ、強制的にという方法もあるが?・・・それを俺様の友である古賀にするのは些か俺様のポリシーに関わるのだ」

「・・・どういう方法なの?」

「俺様の異常を使って従わせると言う方法だな」

「それはちょっと・・・」

良いと言っても勿論やらんかな?

「で、あるだろうよ。俺様もコレはやらんし、友にやるべき事では無いと自負している」

グランツは……側近に位置するのか？

「あつ！名瀬ちゃん！」

「なんだとっ！名瀬！」

名瀬を発見し、そちらに向かう。
その後、名瀬と話した。

そんな古賀が異常（アブノーマル）に近付いた一日であった。

第十帝 半超人古賀（後書き）

久しぶりです。

・・・今回は色々はっちゃけてしまった感じがしました。

話が思いつき次第更新するので、遅筆になる恐れがありますが、今年もよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2180o/>

支配的な異常者

2011年1月27日12時36分発行